

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 木屋瀬 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・昨年度に比べて、正答率が上がり、全国平均正答率と同程度であった。 ・無解答率がなく、どの問題にも根気よく取り組んでいる。 ・言語についての知識・理解・技能における正答率が高かった。	全国平均正答率との比較 同程度である
	よってきた問題	・漢字を文の中で正しく使ったり、慣用句の意味を問う問題の正答率は高かった。	
	努力が必要な問題	・読むことの「目的に応じて必要な情報を捉える」問題の正答率が低かった。	

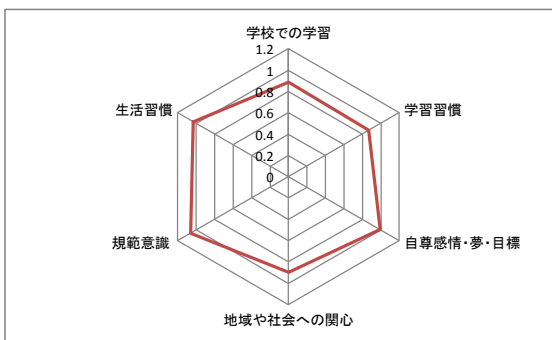
国語B	全体的な傾向や特徴など	・昨年度に比べて、正答率が上がり、全国平均正答率と同程度であった。 ・読む能力を問う問題の正答率が全国平均正答率と比べて低かった。 ・無解答率がどの問題も全国と比べて低かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・他のものと比較して書くときの工夫を捉える選択式問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比較して書く記述式の問題の正答率が低かった。	

算数A	全体的な傾向や特徴など	・昨年度に比べて、正答率が上がり、全国平均正答率と同程度であった。 数量や図形についての知識・理解を問う問題の正答率が全国と比べて低かった。 ・無解答率が比較的lowく、どの問題にも根気よく取り組んでいる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・混み具合の比べ方の理解を問う問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・単位量の大きさを求めたり、その意味を理解しているかを問う問題の正答率が低かった。	

算数B	全体的な傾向や特徴など	・昨年度に比べて、正答率が上がり、全国平均正答率と同程度であった。 ・数学的な考え方を問う問題の正答率が全国平均正答率と比べて、高かった。	全国平均正答率との比較 同程度である
	よってきた問題	・示された考えを理解して、数量の関係を考察して式で表す問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・敷き詰められたものからの中に、条件に合う図形を見いだす問題の正答率が全国平均正答率より低かった。	

理科	全体的な傾向や特徴など	・自然事象への関心・意欲・態度の正答率は全国平均正答率と比べて高かった。 ・科学的な思考・表現に関する問題の正答率が、全国平均正答率と比べて高かった。 ・無解答率が比較的lowく、どの問題にも根気よく取り組んでいる。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・2つの異なる方法の実験結果を分析して考察する問題の正答率が高く、全国平均正答率より高かった。	
	努力が必要な問題	・実験結果を基に分析して、考察したことを記述式で書く問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・「学校のきまりを守っている」「家で学校の宿題をしている」「人の役に立つ人になりたい」という項目において、ほぼ全ての児童が、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した。積極的な生徒指導を通じた実践が規範意識の向上につながっている。 ・食事や就寝に関する項目においても、ほぼ全ての児童が、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した。生活習慣に関する良好な態度が身に付いている。 ・地域の行事への参加や社会での問題や出来事への関心が全国平均と比べて低い。読書指導も含めて、新聞等などを利用した教育(NIE)が考えられる。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・問題形式では、記述式の問題での無解答率が高かった。課題に対して自ら考え、調べ、発表するなどの学習活動を積極的に取り入れる。その際、自分の考えと友だちの考えを比較していくことを通して、自分の考えをノートに書いたり、発表(ペア、全体)などの交流を必ず1時間の中で行う。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習の時間が全国平均と比べて低い。したがって、宿題や自主学習について「方法・内容」を学年・学校で話し合い、家庭に向けて発信していく。 ・「生活がんばりカード」を月1回を実施する。児童・保護者が「ふり返りカード」を通して、学校・家庭での生活を一緒にふり返る手立てと
